

人種論争のミッシングリンク

モースによる大森貝塚の発掘の結果、日本列島における石器時代の存在が明らかになったが、その担い手は先住民だと考えられ、アイヌ説、コロポックル説などの学説が唱えられた。しかし研究の舞台になったのは、関東地方の貝塚が中心で、近畿地方で石器時代の研究が本格的に進むのは、ようやく大正年間になってからだった。

大正6年(1917年)6月、ヨーロッパ留学を前年に終え、京都帝国大学に新設された考古学講座の担当となった濱田耕作氏が、現大阪府藤井寺市の国府遺跡で発掘調査を行ったのがきっかけだ。遺跡で収集された大型石器がヨーロッパの旧石器と似ていることに注目した濱田氏が、その当否を確認するため、層位学など、近代的な手法を用いた発掘調査を実施したところ、旧石器の存在こそ確認できなかったものの、思いがけず、近畿地方で初めてとなる石器時代の人骨が3体見つかったのだ。2カ月後の7月23日～8月20日頃には、東京帝国大学人類学教室の講師を務めていた鳥居龍蔵氏が、本山彦一(大阪毎日新聞社主)、岩井武俊氏(同京都支局長)とともに、唐古遺跡、国府遺跡など、畿内地方(大和、河内、和泉、紀伊)の石器時代遺跡について発掘を含めた調査を行った。国府遺跡では、濱田氏が調査を行った地点の隣接地の発掘を行い、人骨を4体発見している。一行の調査の様子は20数回にわたって大阪毎日新聞の紙面に掲載されるとともに、鳥居氏は、『人類学雑誌』32巻9号(1917年)を「有史以前の畿内」と題した特集号として、調査の成果を報告し、近畿地方の石器時代に関する重要な提言を行った。

鳥居氏の考えによれば、日本列島における有史以前の石器時代は、①アイヌの石器時代＝縄文式土器の時代、②「固有日本人」の石器時代＝弥生式土器の時代、に二区分できる。とくに、大和における調査の成果から、②「固有日本人」が用いた弥生式土器は、①「アイヌ派の土器」(縄文土器)とは無関係だが、古墳時代の土器(祝部土器)と混在することが多く、今日の日本人の祖先が用いたものだと考えられた。さらに鳥居氏は、すでに大陸でフィールド調査を重ねていて、朝鮮半島から遼東半島にかけての先史時代の石器が、弥生式土器に伴う石器と近似することに気づいていたので、②「固有日本人」と弥生式土器の文化は大陸に由来すると論じたのだ。

一方、翌年(1918年)3月に刊行された国府遺跡の発掘調査報告で、濱田氏は、鳥居氏の発掘した人骨がアイヌに近似するとして小金井良精氏(東京帝国大学人類学教室)の説に疑問を呈しつつ、国府のような弥生式土器に伴う石器時代遺跡は、アイヌ系以外の「原日本人」の所産だと考えた。さらに濱田氏は、各地出土の弥生式土器の実測図を集成する事業に着手し、翌大正8年(1919年)、その成果を「弥生式土器形式分類図録」として報告した。全国の弥生式土器を集成する事業は、その後、森本六爾氏の主宰する東京考古学会が引き継ぎ、会誌『考古学』を舞台に研究が進められ、森本六爾・小林行雄編『弥生式土器蒐成図録』(1938年～1939年)として結実した。その過程で、弥生式土器の時期区分が行われ、初期の弥生式土器が北部九州

から近畿地方へと伝播したという理解が示されるなど、弥生文化を理解する基本的な枠組みが形成されることになる。

石器時代の人種論に関しては、国府遺跡の発掘調査をきっかけに問題に取り組んだ清野謙治氏(京都帝国大学解剖学教室)が、岡山県の津雲貝塚など、多くの貝塚(縄文時代)の発掘で得られた人骨形態の統計的研究を行い、石器時代人骨とは異なって、古墳時代の人骨は朝鮮半島のものと同く、石器時代から古墳時代の間大陸民の混血、あるいは集団の置換が生じたと考えた。しかし、肝心の弥生式土器に伴う人骨は資料が欠落し、議論できない状態が続いていた。

土井ヶ浜遺跡の弥生人骨

戦後になり、山口県豊北町土井ヶ浜の砂丘で発見された人骨や土器片が、地元の中学校教員によって、九州大学医学部解剖学教室に届けられた。この資料が、当時、教授として着任していた金関丈夫氏の目に留まり、昭和28年(1953年)～昭和32年(1957年)にかけて、5次にわたって行われた発掘調査で、200体を越える弥生時代の人骨が出土した。また昭和30年(1955年)、佐賀県の三津永田遺跡でも開発に伴う甕棺墓の調査で弥生時代の人骨が見つかり、弥生時代の人骨資料が一気に充実することになる。金関氏による分析の結果、両遺跡で出土した人骨の特徴は、頭が丸く、顔は面長・扁平で、四肢骨が長く、身長も高いなど、縄文人との間に大きく明瞭な隔たりがあるというものだった。中橋孝博氏(九州大学名誉教授)によると、昭和30年代に金関氏が発表したこの「渡来・混血説」は、当初、必ずしも賛同が多くなかったが、その後、遺伝学的な分析も含めた諸分野の研究が進んで支持を増やし、今はすっかり定説化した。

ちなみに、昨年長逝された金関恕先生は、土井ヶ浜遺跡や三津永田遺跡の発掘当時、京都大学で考古学を専攻する学生だったが、いずれの発掘調査にも参加して、父の丈夫氏を手伝っている。本年5月、遺跡に近接する土井ヶ浜人類学ミュージアムで開催された企画展「土井ヶ浜遺跡ー日本人のルーツを物語る遺跡ー」では、先生の若き日の写真や、大学ノートに記された発掘日誌、発掘現場の写真などが展示され、さらには発掘作業の映像までが上映されていた。人骨研究に大きな足跡を残した金関丈夫先生は、晩年、天理市内の岩室町に居をかまえて過ごしておられたが、没後、自らが九州大学の骨格標本となられた。ご子息、恕先生も、父の遺言どおり、献体を行い、同じく骨格標本となる運命に従われた。



再現された土井ヶ浜遺跡の発掘現場